虫の目 鳥の目 魚の目
MUSHI NO ME TORI NO ME UO NO ME

魅力と価値をどう次代に伝える 携わる人々の仕事を広く社会に

千尋
Chihiro

二〇二六年は昭和元（一九二六）年から満一〇〇年に当たる。この間、日本の建築は技術や生活、社会制度の変化に応じて姿を変えてきた。近現代建築は時代の変化とともに、日本の社会や文化を映し出してきたといえよう。

近現代建築の記録と保存に取り組む学術団体「DOCOMOMO Japan」（ドコモモ・ジャパン）が一九二〇年以降の国内建築を対象に、歴史的・文化的に価値ある建築を二〇〇〇年から選定している。毎年一〇作品程度を選び、二〇二五年には選定建築が三〇〇作品を超えた。第一号の「一連の同潤会アパートメントハウス」（一九二六～一九三四年竣工）は現存していない。三〇〇作品のうち四分の一近くの約七〇作品が文化財や景観形成建造物などとして保全されているが、残念ながら約四〇作品は姿を消している。

将来にわたり継承すべき魅力あふれる建築を広く伝えようと、三〇〇選定記念展「モダン・ムーブメントと建築の現在」が国立近現代建築資料館（東京都文京区）で開催されている。第一部「価値と魅力」（会期・十一月二十三日まで）、第二部「継承と活用」（十二月三日～二〇二七年二月二十三日）で構成する。二五年以上にわたる選定活動の成果をもとに、日本のモダン・ムーブメント建築の全体像を俯瞰。一、二部合わせて約一〇〇作品を紹介しながら、近現代建築の流れを体系的にたどれる。

第一部は二〇〇〇年に始まった選定の歩みとともに、各建築の価値や魅力を建築にまつわるエピソードを交えて伝えている。第二部は失われた建築があることを示したうえで、リユースされた建築や、時代とともに姿を変えた建築がどのように受け継がれてきたかをたどる。原図や模型、写真、映像、関連資料など多様な展示を通じて約一〇〇の選定建築を多面的に解説するとともに、一九二一年から一九八九年までに竣工した三〇〇の選定建築すべてを映像で紹介している。

モダン・ムーブメントの建築が持つ魅力と文化的価値を知るきっかけとなる展覧会だ。解体された建築がある一方で、時代の変化に応じ再生・継承された建築もある。近現代建築をどのように使い続け、その価値を次代へいかに伝えるか考えていきたい。

巨匠の足跡たどり魅力味わう

東京都台東区に位置し、広い敷地内に自然がいっぱいの上野公園。桜の名所としても有名な公園だが、モミジやイチョウなどが色づく紅葉の季節も見応えがあり、都会の喧騒を忘れるような風景を楽しめる。動物園や博物館など施設も多く、著名な建築家が設計した作品が並ぶ。

JR上野駅公園口から徒歩約一分の場所にある「国立西洋美術館」は、二十世紀を代表する近代建築の巨匠ル・コルビュジエが日本で手掛けた唯一の建築として知られる。世界各地にあるコルビュジエ建築のうち、近代建築運動への顕著な貢献が見られる七カ国に点在する一七作品の一つとして、二〇一六年七月に世界文化遺産へ登録された。

コルビュジエが描いた設計図面はわずか一二枚で、一枚を除き寸法が入っていなかった。図面とともに送られてきた書簡には、日本の弟子たちを信頼し、彼らが寸法を書き入れることができると信じていると書かれていたそうだ。コルビュジエの下で学んだ前川國男が構造と設備、坂倉準三と吉阪隆正が建築を担当し、師の意志を反映しながら新たに実施設計図を起こした。施工を担った清水建設の技術者らとともに日々試行錯誤し、コルビュジエ建築を実現したのだろう。

今年は世界遺産登録一〇周年の節目の年。西洋美術館や台東区が様々な記念事業を展開している。巨匠の足跡をたどり建築を読み解きながら、その魅力を味わう。公園を散策する楽しみが一つ増えた。

各地で盛り上がる建築祭

普段非公開の建築を開き、使い手やつくり手の想いに触れる「建築祭」が全国的に盛り上がりを見せている。過去最多の一五一作品の建築が参加した第三回「東京建築祭」（五月十六～二十四日開催）は、昨年の約一・五倍となる延べ一六万人が訪れたという。

この流れは秋の大阪、京都へ続く。「生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪（イケフェス大阪）二〇二六」は十月二十四、二十五日をメイン期間にし、二二〇を超える建築が参加。五回目を迎える「京都モダン建築祭」（十月三十一日～十一月八日開催）には、過去最多となる約一五〇作品の建築が参加となった。

普段は入れない建築を特定の日に公開する動きを、日本で最初に実現させたのが大阪だ。二〇一四年に始まった「イケフェス大阪」は秋の風物詩として定着している。二〇二二年に始まった京都モダン建築祭は、民間を中心とする実行委員会が主催し、事務局運営を支えるため、有料のパスポート制を採用した。東京建築祭はこうした経験を生かしながら無料の特別公開と特別展示を核に、有料のガイドツアーを組み合わせ、東京にふさわしい新たな仕組みで運営を行っている。

東京建築祭実行委員長で、京都モダン建築祭実行委員、イケフェス大阪実行委員など、各地の建築祭に携わる建築史家の倉方俊輔氏（大阪公立大学教授）は、「建設に携わる方々の仕事を広く社会に知ってもらいたい」と狙いを語る。だからこそ業界内の催しに見えないことを大切にしているという。業界のPRイベントだと思われれば、一般の人に届きにくくなるからだそうだ。

「東京建築祭に参加する方々の数や幅広さは、これまでの建築業界のイベントでは想像できなかったものだろう。より多くの企業が、この機会を生かしてほしいと思う」（倉方氏）

普段非公開の建築の扉が開く貴重な機会を通じて多くの人に建築を楽しんでほしい。それがまちを知り、人を知り、まちを自分たちのものとして考える入り口になる。良い建築が残り、良い仕事が評価され、次の良い建築が生まれる。そんな好循環を築いていきたい。